

## フィリピンにおける熱帯果実の生産・流通事情

中央果実基金・海外果樹農業情報No.74

## 1 概 況

フィリピンは東南アジアにおける果樹の大生産国である。また、東南アジア最大の生鮮果実輸出国で、我が国への熱帯果実の主要供給国でもあり、我が国の果実全体の需給には少なからず影響を与えている。世界における生産量の順位は、バナナが5位前後、パイナップルはタイに次いで2位、マンゴー6位前後、パパイヤの生産量は世界の10位以内には入っていないが、我が国から見れば米国に次ぐ輸入先である。

果樹産業は、フィリピンの農業部門の重要な一分野であり、2000年の農業総産出額の約11%を占め、少なくとも1千万人の雇用の場を提供している。果樹産業は外貨獲得の主要な源でもあり、1996年から2000年までに農業総輸出額の22%に相当する約23億ドルを生み出している。

フィリピンの農業気象条件は各種の熱帯

果実の成長に適しており、果樹はフィリピン全土で生育するが、輸出目的の果実生産のほとんどはミンダナオ島である。

## 2 生産・利用の現状と展望

## (1) 栽培面積と生産量

## 1) 栽培面積

2000年におけるフィリピンの各種果樹の全栽培面積は68万3千haで農業総面積1,030万haの約7%と推定されている。果樹の栽培面積のうち、バナナが最も大きく51%を占め、次いで、マンゴーの20%、パイナップルの6%である。柑橘類は約5%で、残りの18%はパパイヤを含むその他の果樹が栽培されている。

## 2) 収穫量

2000年の果実生産総量は720万tであった。うちバナナが60%近く416万tを占めている。1998年のエルニーニョ現象による干ば

表1 主要果実の栽培面積と生産量 (1996~2000年)

(単位: 千ha, 千t)

年	全果実		バナナ		パイナップル		マンゴー		パパイヤ	
	面積	量	面積	量	面積	量	面積	量	面積	量
1996	633	6,368	327	3,312	45	1,542	117	787	7.4	114
1997	651	7,265	338	3,773	40	1,638	125	990	7.5	110
1998	647	6,796	328	3,493	38	1,489	130	994	7.6	107
1999	668	6,959	342	3,869	37	1,530	132	866	7.9	113
2000	683	7,219	348	4,156	43	1,524	134	855	8.4	121

出典: BAS (農業統計局)

つによりほとんど全ての果実で生産量が減少したが、もしなければさらに増加したと思われる。

(2) 主要果実の用途別仕向け量

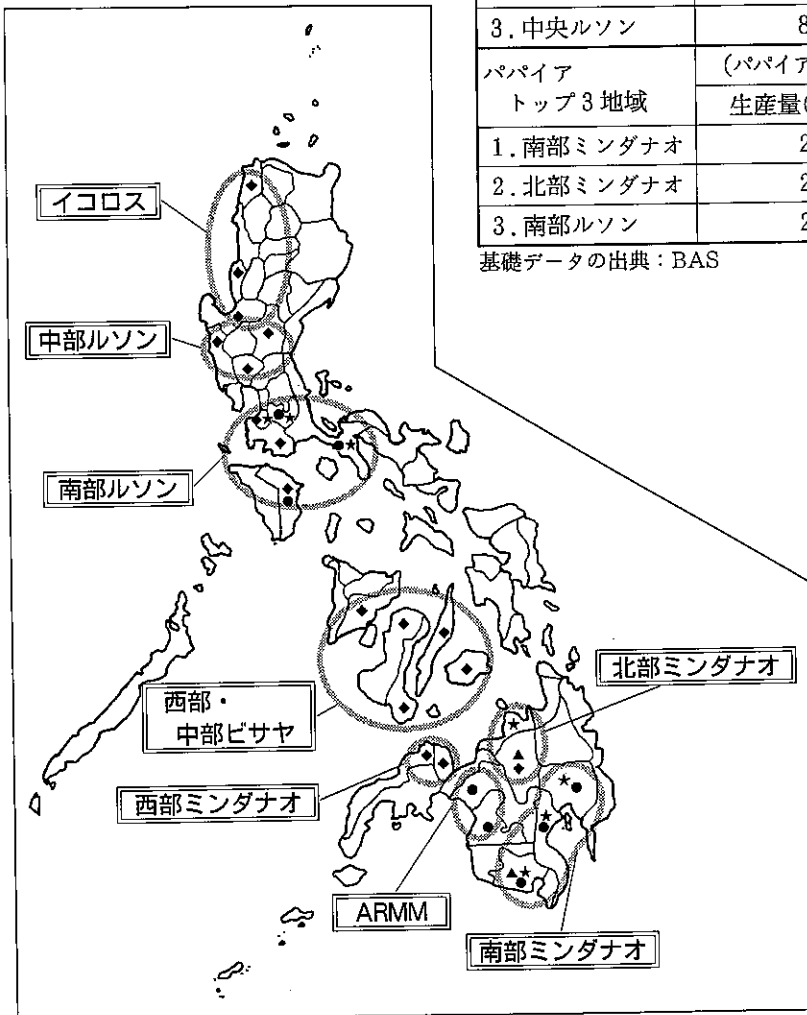
1) バナナ

1998年(以下同じ)の全生産量のうち約32%が輸出され、17%はバナナチップ、バナナケチャップ等の製品に加工、4%は飼料と廃棄物へ、残り約170万トンが国内生食用に回された。

表2 2000年現在の生産量でみた先進地域

バナナ トップ3地域	(バナナ生産量, 全国合計=4,156千t)	
	生産量(千t)	シェア(%)
1. 南部ミンダナオ	1,914	46
2. カガヤンバレー	399	10
3. 中央ミンダナオ	361	9
パインアップル トップ3地域	(パインアップル生産量, 全国合計=1,524千t)	
	生産量(千t)	シェア(%)
1. 北部ミンダナオ	782	51
2. 南部ミンダナオ	599	39
3. 南部ルソン	62	4
マンゴー トップ3地域	(マンゴー生産量, 全国合計=855千t)	
	生産量(千t)	シェア(%)
1. イロコス地域	369	43
2. 南部ルソン	104	12
3. 中央ルソン	88	10
パパイア トップ3地域	(パパイア生産量, 全国合計=121千t)	
	生産量(千t)	シェア(%)
1. 南部ミンダナオ	23	19
2. 北部ミンダナオ	21	17
3. 南部ルソン	21	17

基礎データの出典: BAS



主要果実の生産地域

- バナナ
- ▲パインアップル
- ◆マンゴー
- ★パパイア

## 2) マンゴー

生産量のうち、生鮮果実及び加工品の形で輸出される量は10%以下で、90%は国内の生食に消費されている。収穫した生鮮果実のうち他の形に加工されているのは極少量である。

## 3) パインアップル

生産量の約40%が加工に用いられ、10%が生鮮果実として海外へ輸出されている。全生産量の約45%が国内消費に利用されている。

## 4) パパイア

生産量の約5%だけが輸出されており、約90%が国内で消費されている。

## (3) 主要果実の収穫と販売時期

## 1) バナナ

バナナはフィリピンのほとんどの地域で一年を通じて収穫され、特に販売期間というものがない。しかし、バナナの取引業者は、マンゴーやスイカといった季節果実が地方市場に多く出回る3月から5月を相対的に端境期と考えている。

表3 主要果実の生産及び利用状況(1985~1998年)

(単位:千トン)

項 目		1985年	1990年	1995年	1998年
バ ナ ナ	生 産	3,127	2,981	3,499	3,561
	利 用				
	輸 出	937	851	1,213	1,148
	飼料及び廃棄物	131	128	137	145
	加 工	547	532	571	603
	正味食料可処分量	1,511	1,469	1,577	1,665
マ ン ゴ ー	生 産	356	364	555	917
	利 用				
	輸 出	9.3	13.0	43.9	51.4
	飼料及び廃棄物	20.8	21.1	30.7	51.9
	加 工	0	0	0	0
	正味食料可処分量	325.9	329.8	480.8	813.7
パ イ ン ア ッ プ ル	生 産	1,030	1,156	1,442	1,495
	利 用				
	輸 出	239	-	163	117
	飼料及び廃棄物	47	69	77	83
	加 工	348	508	563	606
	正味食料可処分量	396	577	640	689
パ パ イ ア	生 産	93	65	58	64
	利 用				
	輸 出	0	1.1	2.3	3.3
	飼料及び廃棄物	5.6	3.8	3.4	3.6
	加 工	0	0	0	0
	正味食料可処分量	88	60	52	57

出典: BAS

表4 主要輸出果実産業の生産目標

品 種	(基本年次)	2004年 (短期)	2007年 (中期)	2012年 (長期)
バナナ	(1998年)			
生産目標 (t/ha)	7~12	10~14	13~18	16~23
収穫後損失 (%)	35~40			
削減率 (%)		3	5	10
パパイヤ	(2001年)			
収量の増加・全国 (t/ha)	28	34 (20%)	42 (50%)	56 (200%)
収穫後損失の削減 (%)	27~42	23~38	20~29	10~14
周年供給		1月から6月までの供給の増加		
マンゴー	(2001年)			
収量の増加・全国 (t/ha)	7.14	(5%)	(15%)	(20%)
収穫後損失の削減 (%)	40	5	10	20
周年供給 (%)		3~5ヵ月の延長		

出典：NAFC（国家農業漁業会議），2002年

## 2) マンゴー

マンゴーは季節的果物であり、収穫期のピークは、ルソン島では2月から5月、ビサヤとミンダナオでは8月まで延びる。

1970年代の初め化学的開花誘導技術が導入され、マンゴーの通年生産が可能になったが化学薬剤が高価であるため、ほとんどの生産者や契約散布業者は雨期の散布を避けている。

生産には明瞭な季節性があることから、取引のピークが収穫のピーク期と一致している。首都マニラやセブでは、ビサヤとミンダナオの複数のマンゴー生産州からの供給が可能であるため周年販売されている。

## 3) パインアップル

パインアップルは、季節外の開花や結実をもたらすことができる薬剤（例えば、炭化カルシウム）の散布によって年中収穫が可能となり、ミンダナオの多国籍企業や契約栽培者は、年間を通じての収穫を計画す

ることができるようになった。しかし、ルソンの取引業者は収穫量が通常多い3月から5月をピーク期と考えている。

## 4) パパイア

パパイアは、一年を通じて結実可能な永年性作物であり一年中収穫されるが、販売のピークは、通常、供給が比較的多い4月から6月である。

## (4) 生産の展望

果樹産業の開発は、フィリピン政府の2001年から2004年の農業部門の中期計画において優先事項の一つとされており、計画期間中に果樹部門は3.4%から5.7%の年平均成長率を達成することが期待されている。

果樹部門に対する政府の方針に従って、農業省は民間部門と協議して、バナナ、マンゴー及びパパイヤを含む主要果実について、① 品種改良と技術の開発、② 生産コストと収穫後の損失の削減、③ 収穫後の

加工及び流通コストの削減並びに④ 政策及び監視環境の強化により高品質の果実の年間通じての生産と供給を増加させることを内容とする“戦略的行動計画”を創案している。

また、主要産業協同組合、企業及び関係政府機関の各代表から構成される協議グループは、主要な輸出果実について短期、中期及び長期の生産目標を作成した。

世界市場で有機栽培果実の需要が高まっていることから、ミンダナオの商業栽培者の多くは、農薬や肥料の使用を最小限にする栽培方法（グリーン・ファームング）に取り組み始めている。まだ極く少量の有機バナナの生産が行われているのみであるが、有機の果実は需要が増加し、価格も高いことから、商業的果実生産者による有機栽培面積の拡大が見込まれている。

### 3 輸出の現状と展望

#### (1) 全体的傾向

2000年の生鮮及び加工果実の輸出額は、フィリピン農業輸出総額の約4分の1の5億1,100万ドルであり、うち生鮮果実が70%を占めている。

生鮮果実の輸出は、1996年から1998年までは減少したが、1998年から2000年には年9.5%増加した。主要果実の中ではバナナが生鮮果実総輸出額の80%以上を占め、以下、マンゴーとパインアップルがそれぞれ10%と7%であった。日本がフィリピンの生鮮果実の最大の市場であり、その輸出総額の約60%を日本向けが占めている。この他の主な市場は、香港、中国、韓国及び台湾である。これらアジアの5カ国で、フィリピンの生鮮果実輸出総額の90%以上を占めている。

表5 果実の輸出金額（1996～2000年）

（単位：FOB価額 百万ドル）

年	1996	1997	1998	1999	2000 (%)
生 鮮 果 実	303	287	281	298	355 (100)
バナナ	237	217	217	241	292 (82)
[うち日本]	[136]	[140]	[134]	[156]	[177]
マンゴー	40	40	42	32	34 (10)
[うち日本]	[17]	[15]	[14]	[12]	[14]
パインアップル	25	27	21	23	24 (7)
[うち日本]	[19]	[22]	[17]	[18]	[20]
パパイヤ	0.4	0.1	0.09	1.6	3.3 (1)
[うち日本]	[0.0]	[0.04]	[0.08]	[1.6]	[3.2]
その他	0.6	3.9	0.9	0.4	1.7 (<1)
加 工 果 実	162	156	14	141	156 (100)
パインアップル	131	123	119	114	127 (81)
その他	31	33	26	27	29 (19)
合 計	465	443	426	439	511

出典：NSO（協同組合開発庁）、DTI（通商産業省）

加工果実製品輸出額は約1億5,500万ドルであり、うち加工パイナップル（缶詰、果汁、濃縮ジュースなど）が84%を占めている。加工果実輸出の金額は1996年から1999年は年率4.5%で減少したが、1999年から2000年には10%増加した。フィリピンの加工果実製品の最大の市場は米国である。その他の重要な輸出先は日本、カナダ、韓国、ドイツ及びベルギーである。

## (2) 貿易の中期展望

### 1) バナナ

中期的に、バナナの輸出に影響を及ぼす要因は、日本のような主要市場での経済の停滞とラテンアメリカ諸国或いは他樹種の果実との競争の激化である。フィリピンの生鮮バナナ輸出団体は、日本市場についてはバナナの供給過剰という見地から、最小の増加又は現状維持と見込んでいるが、バナナは多くの国にとって重要な食品であると考え、政府と民間部門の両者はバナナ産業に明るい展望を持っている。

### 2) マンゴー

1996年から2000年のマンゴーの輸出は年率0.5%の減少であった。1998年の深刻な干ばつは別にして、1997年のアジアの財政危機がマンゴーの輸出産業に大きく影響したものであり、フィリピンのマンゴーの3大市場である日本、香港及びシンガポール

への輸出が落ち込んでいる。

政府は、2002年のフィリピン産マンゴーの米国への輸出再開によりマンゴー産業に明るい展望を持っている。日本は、高品質マンゴーに最高の輸出価格を提示するので、フィリピンのマンゴー輸出業者にとって重要な市場として継続すると見ている。

### 3) パインアップル

他の主要果実と同様、パインアップルの輸出は1997年のアジアの財政危機を契機に大きく落ち込んだ。生鮮パインアップルの輸出は1999年には増加に転じたが、その水準は経済危機以前の貿易量に比べてまだ低く、同じ傾向が加工パインアップルの輸出にも見られる。

フィリピンは日本市場では生鮮パイナップル輸出の比較優位性を持っているが、米国やヨーロッパの市場では加工パインアップルでタイとの厳しい競争に直面しており、中期的に加工パインアップルの新規市場を採す必要がある。

### 4) パパイア

パパイアは、大きな可能性のある主要な果実の一つである。現在、パパイアの輸出の98%は日本市場向けであるが、中期的に政府は生鮮マンゴーの市場を香港、シンガポール、韓国等他の主要なアジア諸国に拡大することを求めている。